

保育者養成と自然体験活動に関する調査 3 —保育学生の意識変化から—

Preschool Teacher Training and Nature-Based Activities (III): Changes in the Awareness of Childcare Students

亀澤 朋恵	福西 朋子
Tomoe Kamezawa	Tomoko Fukunishi
青木 信子	尾高 慶彦
Nobuko Aoki	Yoshihiko Odaka
長倉 里加	河内 純子
Rika Nagakura	Junko Kawachi
	中嶋 麻衣
	Mai Nakajima

（要約）

高田短期大学子ども学科2年生を対象とし、自然体験活動に対する学生の意識の変化を追跡した。2年次修了時には総じて実習での学びを経て保育者としての視点や意識の高まりとともに、子どもにとっての意味や価値の観点から自然体験活動への評価や判断ができるようになっていた。加えて特筆すべきなのは、保育者自身の意識、「楽しさ」への気づきの芽生えであった。2年間の学生の意識変化の追跡から、自然保育に関わる保育者養成の方向性として、子どもと関わる人（保育者、教育者）自身の体験の重要性をふまえた展開が必要であるという見通しが得られた。

（キーワード）

保育、教育、自然体験、保育者養成

I はじめに

近年、子どもの育ちをとりまく環境においてデジタル化、少子化や核家族化、コロナ禍を経て、リアルな体験が不足する傾向にある。そのことは1990年代から指摘され、「自然」や「体験活動」が重要なキーワードとなって久しい。高田短期大学子ども学科では、子どもの体験活動不足という状況を2019（平成30）年度末のFD研修を契機に保育者養成の課題として受けとめ、自然保育に着目したカリキュラム構築のための取り組みを重ねてきた。その成果として2023年度に「たかたん保育特別演習（自然保育）」が開講に至り、第1期目が始動した。2023年度は同演習開講の初年度であり、第1期目の受講対象となる2023年度入学生に対し、今後の授業の構築のための基礎調査として、自然体験に対する意識を捉えることを目指し、調査を継続的に行ってきた。それらの調査のうち、1年次のものについては、保育者養成と自然体験活動に関する調査1（福西ら、2024。以下「調査1」と略称する）、「保育者養成と自然体験活動に関する調査2」（中嶋ら、2025。以下「調査2」と略称する）としてそれぞれまとめた。「調査1」においては、学生の入学時点の自然体験を中心とした生活体験への意識の実態を捉えるため、「青少年の体験活動に関する意識調査」における全国調査との比較をするとともに、保育学生として必要だ

と思われる経験を加味して自然体験や生活体験の項目を設定して調査を行った。「調査2」においては、短大での1年間の授業やゼミナール活動を経たうえでの「自然体験活動」や「自然保育」に対する学生の意識の変化を検討した。

これらの経緯を踏まえ、本稿では調査報告の第3弾として2年次を対象とし次の2点の分析課題を定めて進めることとする。第1にこれまでの実習での体験を経たうえでの学生の意識の変化を分析すること。第2に前稿において「保育の知識・技術や保育内容の学習が深まり、学外での実習経験を積み重ねていく2年次において、『自然体験活動』『自然保育』をキーワードとした学生の学びは、いかにして積みあげられていくのか」という観点から、2年間の教育活動において学生自身がどのようにこの自然体験活動を捉え、「子どもの育ち」に関わる気づきや学びに繋げているのかを考察する。

Ⅱ 学生の自然体験活動に関する実態調査

1. 調査概要

1) 調査の目的

2年次を対象とし、①自然体験活動・遊びに対する意識②自然体験活動に対するハードル意識やリスクを軽減するための方策に関する意識の変化、③あそびと体験に関する考え④2年間の自然体験・自然あそびに対する意識を捉える。1年次との比較を行いながら2年間の調査の総括をし、保育者養成における教育活動、カリキュラム構築の検討に繋げることを目的とする。

2) 調査対象および方法

①調査対象 令和5(2023)年度入学生 138名

②調査方法 Google アンケートフォーム機能による自記述式調査

③調査時期 2年生後期開始時(2024年9月)、修了時(2025年2月)

なお、回答数は2年生後期開始時108、修了時は96であった。

3) 倫理的配慮

調査実施前に口頭で本調査の目的と継続調査であることによる学籍番号記載への協力を求めた。その上で個人が特定されないこと、回答内容は単位取得等の評価に関わらないことを説明し実施した。なお本研究は高田短期大学倫理委員会の審査を受け、高短研審第23-1号として承認されている。

2. 調査結果

1) 実習における自然体験・自然あそびの取り組み

図1は、2年次修了時までの実習において、各実習園での自然体験・自然あそびの活動内容を学生の記述回答より整理したものである。具体的には、実習園での自然体験・自然あそびの取り組みを「調査1」で作成した保育施設での自然体験に関する表3を用いて分類した。その結果、回答数が二桁となった項目を取り上げ、記載している。

2年間の実習を通して、学生が最も経験した自然体験・自然あそびの内容は、「自然物採取(山菜・季節の果物・木の実など)」であった。特に、保育実習Ⅱ(2年生11月)での活動として35件の回答

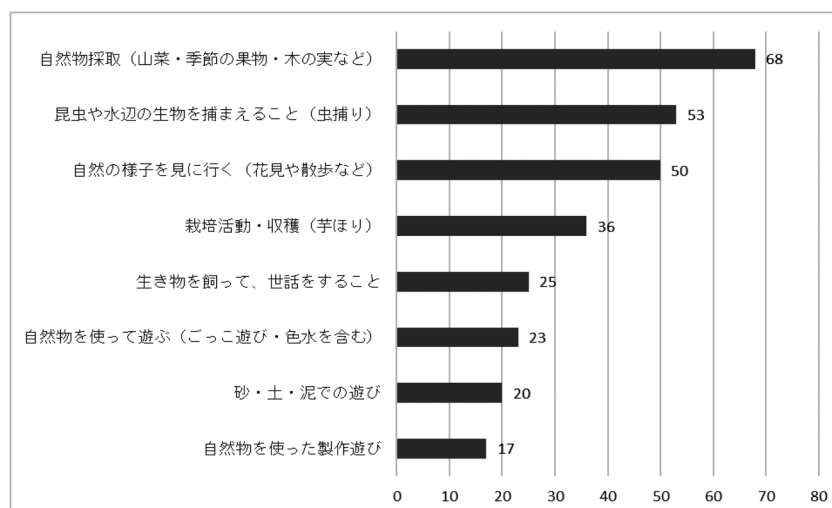


図1 実習における自然体験・自然あそびの活動内容

があり、これは全体のおよそ半数を占めている。このことから、11月の実習では秋の自然物を活用した自然体験を実施している園が多いことがうかがえる。一方、2番目に回答が多い「昆虫や水辺の生物を捕まえること（虫捕り）」では、教育実習Ⅱ（2年生9月）の期間で経験した自然体験として39件の回答があった。9月の実習は気温や湿度が高く、特に生物が活発に活動している時期である。身近にセミやバッタといった生物がいる自然環境が子どもたちの興味や関心を引き出していると考えられる。これらの結果から、各園ではそれぞれの季節でしか経験できない自然とのふれあいを重視していることや子どもにとって比較的身近に存在している自然環境を活動として取り上げていることが分かる。また、3番目に多い「自然の様子を見に行く（花見や散歩など）」については、どの実習時期でも満遍なく回答があり、季節を問わず日常的に自然に親しむ活動が行われていることを示している。自然の様子を見に行く、いわゆる散歩は、季節の移り変わりを子どもたちが感じるきっかけであり、散歩を通しての発見や気づきが「自然物の採取」や「生物を捕まえる」活動へと結びついていると推察できる。

2) 自然体験を行う際にためらうこと

自然体験を行う際にためらうことの自由記述の内容を整理し、その数を比較したものを図2で示す。大きく変化した「虫」「なし」、あまり変化が見られなかった「危険性」について考えたい。

「虫」に関しては、2年次修了時の割合が入学時のおよそ4分の1程度に減少している。

大学の授業で虫に接する機会が多くあったことで慣れてきたと捉えることができる。また、図1でも示されているように、実習での活動内容として昆虫や水辺の生物を捕まえる経験が多いことがわかる。すなわち、大学の授業や実習経験で虫に触れる経験を積み重ね、さらに子どもたちが虫に触れる姿を見的过程中で虫が子どもたちにとって大切な環境の一つであると捉えるようになったことが考えられる。

「なし」は1年次は10%前後であったのが2年次修了時は半数を超えている。つまり、2年間の自然体験を積み重ねる中で、自身がためらうことがなくなったあるいは気になることはあってもためらいの範疇ではないという考え方になったのではないだろうか。自然活動に対しておおらかな見方ができるようになったともいえる。

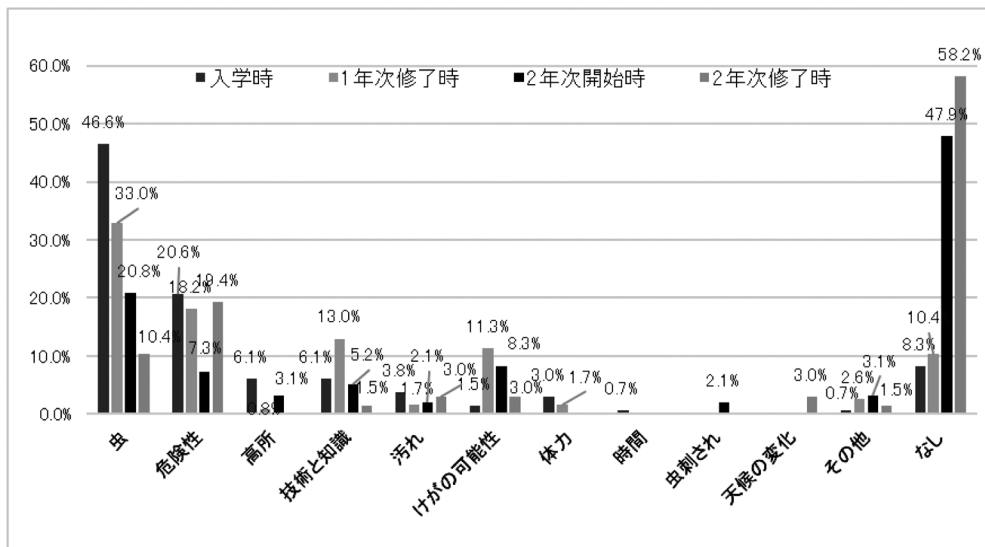


図2 自然体験を行う際にためらうこと（2年間の比較）

「危険性」については2年次開始時のみ減少しており、他はほぼ横ばいである。最初は自然保育は危険なことが多いのではないかと想像していたが、1年間の経験の中でそれほど危険なことはないと捉え、一時的に減少した。しかし、2年次に3回の実習を行い子ども中心の視点が養われ危険性に対する感度も良くなり、再度数値が上がったのではないだろうか。

次に、2年次開始時と2年次修了時に、ためらいを軽減する方法やハードルを乗り越える手段を尋ねたものを「虫」「危険性」に対する記述回答を中心に分析する。

「虫」の対応策として2年次開始時は13件の回答、2年次修了時には6件の回答があった。内容は2年次開始時は「克服する」(5件)「慣れる・触れる機会を増やす」(4件)、「自然遊びは楽しいという概念を持つ・愛着を持つ」(2件)、「自分で虫を作成する」(1件)、「虫の知識を増やす」(1件)であり、2年次終了時は「防備」(3件)、「慣れる」(2件)、「克服する」(1件)であった。回答数が違うため、数の比較ではなく内容を比較したところ、あまり大きな違いはなく、虫と共存する自分なりの手段を考えており、除いたり排除したりすることなく、子どもたちに虫に触れさせるために自分自身の問題として考えていることがわかる。

「危険性」の対応策は、2年次開始時は10件の回答、2年次修了時には17件の回答があった。内容は2年次開始時は、「自然・危機管理の知識をつける」(2件)、「保育者同士の連携」(2件)、「自然体験の経験を積む」(2件)、「安心できる環境で行う」(2件)、「子どもたちに予め約束事を伝えておく」(1件)、「下見をする」(1件)であった。2年次修了時は「事前の下見や計画」(11件)、「保育者同士の連携」(4件)、「簡単な自然遊びを少しずつする」(1件)、「自然整備」(1件)で、開始時と比較すると計画や連携を重要視している傾向にある。2年次に3回の実習経験があったことで、子どもの姿がイメージでき、授業はもちろん保育を体験したからこそ実感できることと思われる。上で記述したように、2年次修了時にためらう内容の「危険性」の数値は増加しているが、その対応策が現実的で保育現場に近い視点で捉えることができおり、その点が経験の積み重ねの成果といえるのではないだろうか。

さらに、2 年次修了時においては、ためらう内容を記述していない学生の中でためらいの軽減策を記述している学生が何人かおり、その記述内容に注目したい。「日常生活の中に自然のものをに入れて身近なものに感じるようにする」(5 名)、「自分自身が楽しむ」(1 名)、「意識を変えることが必要」(1 名)との記述があった。これらから、自然保育に対してあまり難しく考えずに、まずは楽しむことからとの意識が感じられ、私たち教員が学生に気づいてほしかった考え方と重なる部分を見出すことができたといえよう。

3) 子どもにとっての体験や遊びについて

表 1 は「子どもにとって体験や遊びをすることはどのようなものだと思いますか」の記述回答の頻出単語 2 か年分を調査時期別に整理したものである。表れた単語を 20 単語に絞り、回答者数に対する割合を基準に順位付けした。

表 1 子どもにとっての遊びや体験についての記述回答・頻出単語順（調査時期別）

	入学時（2023年4月） 回答者数:131名			1年修了時（2024年3月） 回答者数:115名			2年後期開始前（2024年9月） 回答者数:108名			2年修了時（2025年3月） 回答者数:96名		
頻出 順位	単語	数	割合	単語	数	割合	単語	数	割合	単語	数	割合
1	大切	26	19.8%	成長	20	17.4%	感性・五感・感受性	24	22.2%	成長	32	33.3%
2	成長	25	19.1%	経験	14	12.2%	経験	20	18.5%	大切	16	16.7%
3	経験	22	16.8%	大切	10	8.7%	大切	20	18.5%	学び（学ぶ・学べる）	14	14.6%
4	学び（学ぶ・学べる）	20	15.3%	学び（学ぶ・学べる）	9	7.8%	学び（学ぶ・学べる）	19	17.6%	感性・五感・感受性	13	13.5%
5	想像力・創造力	9	6.9%	発達	8	7.0%	成長	17	15.7%	発達	7	7.3%
6	感性・五感・感受性	6	4.6%	感性・五感・感受性	6	5.2%	発見	12	11.1%	経験	6	6.3%
7	のびのび	5	3.8%	興味	5	4.3%	興味	9	8.3%	発見	6	6.3%
8	興味	4	3.1%	将来	4	3.5%	コミュニケーション	7	6.5%	思い出	5	5.2%
9	好奇心	4	3.1%	表現力・表現	3	2.6%	発達	7	6.4%	コミュニケーション	4	4.2%
10	体力	4	3.1%	想像力・創造力	3	2.6%	想像力・創造力	6	5.6%	表現力・表現	3	3.1%
11	思い出	4	3.1%	発見	3	2.6%	好奇心	6	5.6%	興味	3	3.1%
12	発見	3	2.3%	友情（友達）	3	2.6%	友情（友達）	5	4.6%	想像力・創造力	2	2.1%
13	生きる・生きていく	3	2.3%	社会性	3	2.6%	表現力・表現	5	4.6%	協調性	2	2.1%
14	表現力・表現	2	1.5%	のびのび	3	2.6%	体力	4	3.7%	生きる・生きていく	1	1.0%
15	友情（友達）	2	1.5%	好奇心	3	2.6%	思い出	4	3.7%	将来	1	1.0%
16	協調性	1	0.8%	生きる・生きていく	2	1.7%	生きる・生きていく	4	3.7%	友情（友達）	1	1.0%
17	発達	0	0.0%	体力	2	1.7%	社会性	3	2.8%	社会性	1	1.0%
18	将来	0	0.0%	協調性	2	1.7%	協調性	3	2.8%	のびのび	1	1.0%
19	社会性	0	0.0%	コミュニケーション	2	1.7%	将来	1	1.0%	好奇心	1	1.0%
20	コミュニケーション	0	0.0%	思い出	2	1.7%	のびのび	0	0.0%	体力	1	1.0%

上位の頻出単語として「成長」「大切」「学び（学ぶ・学べる）」が各調査時期上位 5 位までに表れている。学生は、子どもにとっての体験や遊びは「子どもが成長するために大切であり、学びが得られるものである」との主旨での記述を多く挙げたと言える。2 か年の変化として、1 年次の単語頻出順位よりも 2 年次に順位が上がった単語に着目すると「感性・五感・感受性」は、2 年後期開始前の調査では頻出単語 1 位、割合が 22.2%、2 年修了時も 13.5%と高い割合であった。その他にも「発見」は 1 年次の割合は 2%程であったのが、2 年後期開始前は 11.1%と高くなっている。「コミュニケーション」は入学時に表れなかった単語であったが、2 年次は 5%前後の割合で表れた（単語は表のゴシック体で表示）。

また、2 年次の記述回答の文字数をうかがうと、後期開始前が平均 35.1 文字と、2 か年通して最も多かった。文字数の多さと記述内容の質の高さとの関連を表すものではないが、2 か年の調査における特徴的な数値として報告する。記述事例としては「子どもの感性を育てると考える。子どもが自然のものや自

らの体を使って遊ぶことで、自然と触れたり見たりしているものから学びを得たり、ほかの子どもとのコミュニケーションに繋がったりしていたため、人や自然から感性を育てていると思う。」や「五感を感じられるので様々な経験の糧になる。花からは色水を作ることが出来たり、虫は幼虫からサナギになって成虫になるという過程を知ることができたりとても良いと思います。」とあり、実際の子どもの姿をイメージした上での内容であると捉えた。

これらの結果は学習と体験の積み重ねによること、特に2年次後期前調査の結果は、4回の実習経験があることに加え、教育実習（3週間）を終えた直後の調査であったことが背景にあると推測する。

4) 2年間の自然体験や自然あそびに対する意識

2年間の自然体験や自然あそびに対する学生の意識を「自身の変化」と「保育に活かす」をキーワードとした設問で記述回答を求めた。

回答は選択とし、「自身の変化」は94回答、「保育に活かす」は65回答を得た。結果から学生の意識の傾向を知るためにカテゴリー名を付け整理した。カテゴリー名は、記述内容から似た意味、意図を拾い作成したものである。表2は、「自身の変化」、表3は「保育に活かす」のカテゴリー別の回答数と回

表2 「自身の変化」の記述回答内容

自身の変化（設問：この2年間で経験した自然体験や自然あそびは、あなたにどのような変化をもたらしましたか）	
自身の遊びの種類と数	<記述数：20>
自然のものだけでなくたくさんの遊びを体験することができることを学び、外遊びでの活動が広がった	
落ち葉を使った製作や木の皮を使った風鈴作りなど自然物に触れながらの製作は無限大にあると思った	
自身の成長	<記述数：18>
柔軟なアイデアを出す力が身についたり、仲間と協力して何かを作る楽しさを知り、子どもたちに伝えていきたいと思った	
虫が苦手だったが、園で小さい虫であれば触れる程度に成長したとを感じる	
好感度	<記述数：15>
自然に触れたことで日々の疲れやストレスが軽減し、楽しく活動することができた	
虫刺されや衣服が汚れると思っていたが、体験を通して、それよりも自然と関わるのがとても楽しいと感じるようになった	
保育における自然あそび実践に対する考え	<記述数：11>
自然保育に対する意識が変わった。楽しいだけではなく危険な面もあるということ、その反面、学ぶことが多いということも知ることが出来た	
いろいろな事前準備をすることで子どもたちの姿を今まで以上に想像するようになった	
自然に対する認識（豊かさ、尊さ、大切さ）	<記述数：9>
季節を味わいながら、過ごすことの大切さやそれを共有することでより暮らしが豊かになると感じた	
自然からしか学べないことを学ぶことができ、身近すぎて気づいていなかったことに気づくことができ、自然に感謝できるようになった	
自然に対する興味	<記述数：8>
今までよりも自然体験や自然遊びに親しむことができ、興味を持って調べて知識を深めたり、実際に楽しんだりすることができた	
自然体験をすることで今まで関心がなかった花や木の実などの植物などにも興味が湧いた	
子どもと自然、自然あそびに対する考え	<記述数：7>
自然体験や自然遊びを通して、子どもにとっての自然の大切さを実感し、保育においても積極的に取り入れたいと感じた。例えば、四季の変化を肌で感じたり、自然の中での遊びが子どもの創造力や探究心を育てることに気づいたりした	
初めは自然遊びをあまり必要と考えていなかったけど、2年間学んできて子どもたちにとっても必要なものだと思えることができた	
感性、心の豊かさ	<記述数：4>
心が穏やかになり、子どもたちに教えたくなった	
その他	<記述数：7>
仲間と仲を深めるきっかけとなった	
新たな保育のあり方を感じた	

表 3 「保育に活かす」の記述回答内容

保育に活かす （設問：この2年間で経験した自然体験や自然あそびを今後、保育にどのように活かしたいと考えますか）	
保育で行いたい自然あそび・活動	<記述数：31>
山は散策に行き、足腰を鍛えて体力をつけたり、自然物に触れて、感受性を育みたい	
自然の音を楽しんだり、自然のものの使用したりした保育活動をしたい	
子どもを主体とした活動	<記述数：12>
子どもたちが無理なく主体的に活動できるよう、園庭にある自然など、身近なものから保育に取り入れて活かしたい	
子どもが興味を持っていることを取り入れ、わくわくするような遊びを考え、活かしていきたいと考える	
保育者も楽しい活動	<記述数：6>
子どもたちが楽しめるようなことを子どもと一緒に楽しめるようにしたい	
自分がやってみて楽しいと思ったことを子どもたちにも共有して、自然体験を楽しみたい	
保育の環境を踏まえた活動	<記述数：6>
その地域、その園でできる自然遊びを考え、子どもたちの様子をみながら保育に活かしていきたいです	
花を飾ったり自然の中を散歩したりするなど、自然がなるべく身近にあるように活かして子どもの生活を豊かにしていきたいと考える	
その他、保育や子どもとの活動の展望	<記述数：12>
製作や遊びなどに活かして、子どもたちと楽しく自然に触れ合っていきたい。テレビやゲームなどだけになってしまわないように、外で遊ぶ楽しさを知り、学んで欲しいと思う	
子ども同士や保育者とのコミュニケーションに活かしていきたいです	

答事例である。回答数については、回答内容に複数のカテゴリーを含む場合は重複させた。回答事例は、各カテゴリーをよく表す内容を選び文字数は 30 字前後の回答からほぼ選択した。文字数については、「自身の変化」の回答の平均文字数が 28.9 文字、「保育に活かす」は 33.4 文字であったことから選択する理由とした。

「自身の変化」の回答は 8 カテゴリーに分けた。大学での自然体験から「自身の遊びの種類と数」が増えたとの内容が 20 回答と最も多かった。次いで、体験することで「自身の成長」を実感、自然体験に対して「好感度」が上がったと続く。また、「自然保育に対する意識が変わった」との回答事例があるように「保育における自然あそび実践に対する考え」も 11 回答あり、保育者の視点から体験を振り返っていた。そして、自然体験によって、自然の大切さへの気づきや感性の豊かさが得られたこともうかがえた。

「保育に活かす」の回答は 4 カテゴリーに分けた。大学で経験した自然あそび・活動を保育現場で行いたいとの回答が最も多かった。また、「子どもを主体」とした活動、園や地域の「環境」を踏まえた活動として活かしたい、そして、「保育者も楽しい」活動にしたい、との回答が挙げられた。

Ⅲ 考察

本稿では、2 年次を対象として保育の学びや実習での体験を通した学びの蓄積を考慮し、保育学生の意識変化を追跡した。これをもとに、自然保育にかかわる保育者養成の構築に向けた若干の考察を行い、結びとしたい。まず、実習での学びと現場の実態を「実習における自然体験・自然あそびの取り組み」で捉えつつ、学生の意識の変化については、1 年次から継続した質問項目の (1)「自然体験活動に対し

ためらうこと（ハードル）」と（2）「子どもにとっての体験や遊びについて」、そして、2年間の振り返りとして（3）「2年間の自然体験や自然あそびに対する意識」の観点から検討を行った。（1）については、経験を重ねるごとに減少していた。一方、「危険性」に関する回答と「ためらい（ハードル）」を軽減する方策については、保育者の目線から思考している様子が見られたほか、「自分自身が楽しむ」という意識が高まっていたことは注目に値する。（2）は、記述回答に頻出するキーワードを抽出した結果、1年次から「成長するために大切であり、学びが得られるもの」と捉えていたが、2年次ではより具体的に子どもの姿を想起し、「感性・五感・感受性」がキーワードである記述内容が多く挙げられた。実習経験や保育の学びの蓄積が看取できるものであった。（3）については、2年間の自然体験活動から、「自身の変化」として「自身の遊びの種類と数」「自身の成長」を得たり、保育における「実践に対する考え」を持ったりしていた。そして「子ども主体」「環境を踏まえた」活動、そして「保育者も楽しい」活動として保育に活かしたい、と捉えていた。学生にとって自然体験活動は主体性、能動性が高いものであったこと、そのうえで自然体験・自然あそびを保育に活かすイメージができたと考える。

2年間の保育学生の意識の変化を総括すると、第1に自然体験活動に対して肯定的・好意的に受け止められていたこと、第2に保育の学びが蓄積されるにつれ、子どもにとっての価値を基準に活動の意味を捉えられるようになっていたこと、第3に自分自身への意識や「楽しさ」への気づきが芽生えていたことが挙げられる。特に第3の点からは、保育者養成段階から学生自身が体験活動に興味をもち楽しさを味わうことは、将来的に子どもの活動を創出することに繋がるとの示唆が得られた。

これらから、「子どもの育ち」に関わる人たち（保育者、教育者など）の体験活動の機会は重要であり、保育者養成における教育活動として位置付けることに意義があると言えよう。今後は、設置した自然保育科目での学びを見据えて、学生の「自然体験」と「子どもの育ち」が相互作用するような教育活動について検討を進めたい。

【引用・参考文献】

福西ほか「保育者養成と自然体験活動に関する調査1－学生の自然体験に関する意識調査－」『高田短期大学育児文化研究』第19号 pp.43-53.

中嶋ほか「保育者養成と自然体験活動に関する調査2－学生の自然体験に関する意識調査－」『高田短期大学育児文化研究』第20号 pp.39-51.

【付記】

本稿は、高田短期大学育児文化研究センターにおける「自然保育とこれからの保育者養成」研究グループメンバーによる執筆である。なお「高田短期大学育児文化紀要」第19号、第20号投稿の調査報告に続く報告である。